

鬼の頭領と宿縁の番
孤独な少女は一途な溺愛を知る

相葉すずか Suzuka Aiba



アルファポリス文庫

序章

「お前みたいな女が、鬼のヨスガだなんて認めない」

女の怒声が響いた直後、桜を見上げていた視界がグラリと揺れた。同時に、脇腹に熱に似た強い痛みを覚えた。

激しい憎しみを感じさせる声のした方に視線を向ければ、お前と呼ばれた娘の目に、血に染まった短刀を握りしめる若い女性の姿が映る。

「お前なんか偽者だ。お前なんか死ねばいいっ」

はらはらと桜舞い散る中、誰かに地面に押しさえつけられてなお、短刀を握る女性は、何かに取り憑かれたように憎しみを吐き出し続ける。

「妖の魂の番であるヨスガ……、その中でも最も尊い存在である鬼のヨスガに、お前なんか選ばれるはずがない」

髪を振り乱し、顔を憤怒の色に染める女性は、瞳を身勝手な欲望に輝かせて、自分

こそがその役目に相応しいと主張する。

人の世に住まう妖にとって、魂の番であるヨスガは特別な存在で、妖は自分のヨスガに全身全霊の愛情を注ぐ。そのため、高貴な妖のヨスガに生まれるということは、人の世における最高の誉れといえる。

ただどそれは、何かに選ばれてなるようなものではない。生まれる前からその魂に刻まれている恒久の理のようなもの。

だから嫉妬に駆られて鬼のヨスガを殺したところで、その地位を奪うことなどできるはずもなく、己のヨスガを失った妖を苦しめるだけなのだ。

そのことを伝えようにも、痛みに意識が混濁して、娘はもう声を発することができない。

「琴葉っ」

そのまま地面にくずおれる娘の体を抱きしめる腕があった。

「……っ」

「琴葉、逝くなっ！」

悲痛な声で名前を呼ばれ、琴葉と呼ばれた娘は自分を抱きかかえる男を見上げた。

舞い散る桜の前に、美しい顔をクシヤクシヤに歪める彼には、普段、鬼の頭領とし

て振る舞う時のような威厳は感じられない。

己のヨスガを失うことに怯える姿は、無垢な子供のようだ。

愛おしい彼にそんな顔をさせてしまうことが、自分が死ぬ以上に辛い。

(一秒でも長く、彼の側にいてあげたい……)

そう思うのに、脈打つような痛みに合わせて、大量の血が流れ出し、生きる力を失っていくのがわかる。

「きり……の……」

妖にとって、魂の番であるヨスガを失うことは、地獄をさまようような苦しみなのだ。

せめて彼の涙を拭いてあげたくて、血で汚れた手をそちらへと伸ばすのだけど、力が入らず彼に届かない。そして伸ばしかけたその手は、操り人形の糸が切れたように、突然、だらんと地面に落ちる。

「琴葉っ！」

彼の悲痛な叫び声を最後に、琴葉の意識は完全に闇に吞まれていく。

それから三百年、時は流れて……

第一章 玉兎饅頭

人と妖、双方の信仰を集める月代神社。その門前商店街に、綺咲美桜の祖父である綺咲修造が営む和菓子屋はあった。

小さな気泡が交じった古いガラスをはめ込んだ引き戸が印象的な、レトロで愛らしい外観の店で、売られている菓子も素朴な味わいだと評判を呼んでいる。

長く地域に愛されている店の屋号は「玉兎堂」——月に暮らすと言われるうさぎの名にちなみ、店の暖簾には、満月を背に飛び跳ねるうさぎが印象めされている。看板商品は、屋号にちなんだ玉兎饅頭という。

参道が五月雨に濡れる日曜日の今日。玉兎堂に客の姿はなく、施錠されているガラス戸には、『臨時休業』の紙が貼られている。

そんな人気のない店の奥では、男性の怒声が響いていた。
「うるさいっ！ 部外者が店の方針に口出しするな」

奥の居住スペースに置かれている仏壇の前で、姿勢よく正座する短髪の青年・玉置秋雄（たまきあきお）に向かって語気を荒らげるのは、美桜の父、綺咲雅彦だ。

この春に高校二年生になったばかりの美桜は、その声量に思わず身をすくめるが、隣に座る玉置は違う。

高校卒業と同時に玉兎堂で修業を始め、今年で二十三歳になる菓子職人の玉置は、鋭い眼差しを雅彦に向けて唸るような声で反論する。

「はあ？ 部外者？ 店の方針？ アンタこそ部外者のくせに、何様のつもりだ？」
「何っ！」

「和菓子屋の仕事をバカにして大学卒業後は家にも寄りつかず、それでいて、面倒事の尻拭いはオヤジさん任せ。あげくオヤジさんが死んだ途端、店を売るから出ていけ……それを、店の方針と言われて納得いくわけがないだろっ！」

腹に響く低い声で唸る玉置は、いざとなれば腕っ節で勝負するとしても言いたげに、店の屋号が入った紺色の甚平の袖をめくる。

玉置の父親も和菓子職人で、若かりし日は玉兎堂で修業を積んでいた。

その縁で彼もこの店で修業しているので、父親から、祖父と雅彦の長年の確執について聞かされているのだろう。

先日、ゴールデンウィークの賑わいが一段落したタイミングを見計らったように、修造が倒れた。

そしてそのまま意識を取り戻すことなく、搬送先の病院で息を引き取ったのが七日前。

生前、本人が『葬儀の後の供養は全て不要』と繰り返し話していたので、そろそろ店を再開しようと考えていた矢先、喪主を美桜に押し付けて葬儀にも姿を現さなかった雅彦が突然店を訪れ、店を売却するからここを出ていけと美桜に言うのだから、玉置が憤るのも無理はない。

黙ったまま沈痛な表情を浮かべる美桜を一瞬横目で窺い、玉置が言葉を続ける。

「それにここを売り払われたら、美桜お嬢さんはどこに行けと言うんですか」

それを聞き、美桜は奥歯を噛みしめた。

美桜の母は彼女が幼い頃に亡くなっている。母の死後すぐに父が再婚し、家庭での居場所を失った美桜は、父方の祖父である修造のもとに身を寄せていた。

「若造が偉そうに。それこそ家族の問題だ。美桜も今年で十七歳なんだから、自分でどうにかして生きればいいだろ」

雅彦が吐き捨てる。

「なっ、アンタそれでも……」

言外に自分は娘を引き取る気はないと匂わす雅彦の言葉に、玉置が腰を浮かせて反論しようとした。

だが場違いなほど明るい笑い声が、その言葉を遮る。

「キャハハ。美桜、ついに住むところもなくなっちゃうんだ。そうしたら、高校は中退するのかしら？ ホントお気の毒」

声の主は、雅彦と並んで座る妹の瑠璃子だ。

小顔な分、二重の目の大きさが際立っている彼女は、甘やかされて育った者特有の傲慢さに満ちていて、愛らしい顔立ちの魅力を半減させている。

そんな彼女の悪意を煮詰めたような声に、美桜は息苦しさを覚えた。

(いつもそう……)

自分でも情けないとは思っているのだが、幼い頃に恐怖心が染みついてしまったせいか、美桜は、雅彦や瑠璃子を前にすると身がすくんで声がうまく出せなくなる。

息苦しきから、美桜は無意識に着ている着物の合わせ目に手を添えた。するとその動きを視界に捉えた瑠璃子の目が、意地悪く光る。

「その着物もこの店の財産なんだから、出ていく時は置いていきなさいよ。」と言って

も、古いし、美桜が袖を通した着物なんて汚いから、燃やすだけだけど」

「この着物は、大事な……」

店先に立つことも多いので、美桜は自宅では基本的に着物姿で過ごしているが、それらのほとんどは、亡くなった修造の妻、つまりは祖母の形見なのだ。それを、美桜への嫌がらせのためだけに燃やすなんて……

「美桜のくせに、私に口答えしないで」

ピシヤリと言つて、瑠璃子は意地悪く笑う。

「これ瑠璃子、そんなにはしゃいで行儀の悪い」

どうにか反論しようと言葉を探す美桜を横目に眺めて、形ばかり瑠璃子を窘めるのは、彼女の母で、今の雅彦の妻である宏美だ。

言葉とは裏腹に、宏美は表情で娘をけしかける。

玉置と雅彦が話し合う間、一応は黙っていたが、美桜の名前が話題に上ったことで加虐心が抑えられなくなつたらしい。

「だってママ、あの疫病神が、ついに野垂れ死ぬかもしれないのよ。見ものじゃない」

瑠璃子が愉快そうに言つと、つられて宏美も笑う。

「そうね。美桜は、自分の母親を見殺しにするような子なんですもの。お義父さんが死んだのも、もしかしたらこの疫病神のせいなんじゃないの」

そう言つて、宏美が「おお、怖い怖い」と大げさに身を震わせて自分の肩を抱くと、瑠璃子もしゃいで動きを真似る。

自分の母親を見殺しにしたという言葉に、美桜は思わず泣きそうになる。

(この人たちの前で、泣いたりしない)

なけなしのプライドで下唇を噛み、涙を堪える美桜の姿に、顔を寄せて囁き合う母娘の表情が一層醜悪に染まる。

「お前ら——」

玉置が片膝を立ていよいよ力業に出ようとした時、庭の方から「失礼します」と、男性の静かな声が聞こえてきた。

見ると、換気のために細く開けてあつた縁側の窓の向こうに、眼鏡をかけたスーツ姿の男性が傘をさして立っていた。

(誰?)

美桜は首をかしげて目を凝らす。

「店の方を訪ねたのですが、閉まっていたので裏に回らせていただきました」

美桜の心の声に答えるように、スーツ姿の男性が言う。

そして一礼して顔を上げると、男性は眼鏡の奥の目を不満げに細めた。

「せ、せつかくおこしいただいたのに……すみません。実は先日、店主が急逝したため、今は店を休ませていただいております……」

瑠璃子たちとの会話が中断したことに安堵しつつ、美桜は、腰を浮かせて縁側に歩み寄って説明する。

修造が厨房で突然倒れてからずっと、玉兎堂は臨時休業が続いている。

葬儀に参列した近所の人は当然知っているし、事前に注文を受けていた客には、事情を説明してキャンセルを入れさせてもらった。

だから参拜のついでに訪れた一見の客なのだろうと思っただが、違ったらしい。

「存じております」

男性は、膝をついて窓を大きく開ける美桜の動きに合わせて軒端に歩み寄ると、傘を閉じてそう答えた。

背後で雅彦が迷惑と言いたげに舌打ちをするのが聞こえた。

男性は、雅彦に一瞬冷やかな眼差しを向けた後で、言葉が続ける。

「本日は、私の主に代わって弔問と、修造殿よりお預かりしていた品をお孫様にお

返しするためにお伺いいたしました」

「オヤジの？」

立ち上がった雅彦は縁側に立つと、不躰な視線を男性に巡らす。

そして、彼のスーツの胸元で視線を止めて息を呑む。

「そのマークは、鬼の……」

雅彦の言葉につられて視線を向けると、男性が着ているスーツの襟元には赤い六角形の社章が留められている。かなり簡略化された椿の花をかたどったそれは、この国の民なら誰もが知る、椿谷商社^{つばみやしょうしゃ}という総合商社のものだ。

時代の流れと共に社名を変えてはいるが、椿谷商社の創業は古く、永らくこの国の経済を支え、裏で政界をも牛耳ると言われている。

その社章を見て雅彦が思わず『鬼の……』と呟いたのは、その経営者が、妖の中でも特別な存在として敬われている鬼の頭領だからだ。

相手が、自分が何者なのか理解するのを待って、男は名刺入れを取り出し、その中の一枚を雅彦に差し出す。

「椿谷商社社長秘書の一条清志郎と申します」

「社長秘書、ということとは……」

「ええ。私の主は鬼の頭領である霧乃様です」

そのやり取りに、背後で瑠璃子と宏美が色めきたつ。

「鬼の……」

「あの、霧乃様の」

声を弾ませる宏美と瑠璃子を無視して、清志郎が美桜に声をかける。

「お邪魔いたします」

自分の主の絶大なる権力を承知している様子の清志郎は、雅彦ではなく美桜に断りを入れると、そのまま縁側から家上がり込む。

雅彦でさえ、それを止めることはなく、突然の来訪者を受け入れた。

この国は古くから、鬼や天狗、妖狐……俗に妖怪と呼ばれる妖と人間が共存してきた。

それら妖は、普段は人間と同じ姿をしており、人間と変わらぬ生活を送っている。ただ妖として派手に力を使う時は、昔話で描かれているような人外の姿に変わるのだという。

妖たちは、人知を超えた優れた能力を持ち、政治や経済、医療といった様々な分野

で活躍し、日本の発展を支えてきた。

そのため、人間は妖を『妖怪』と敬称を付けて呼び、尊んでいる。

中でも強い妖力を持つ鬼は特別な存在とされ、鬼の頭領であり、今は椿谷商社の社長を務める霧乃はこの国で、人間からも妖からも最も尊ばれる存在なのだ。

その使いとして玉兎堂を訪れた清志郎は、自身は人間だが、家が代々霧乃に仕えているのだと話した。

「改めまして、鬼の頭領である霧乃様にお仕えする一条清志郎と申します。この度は、綺咲修造殿の計報を受け、主に代わり、我が主が故人と交わした約束を果たすためお邪魔させていただきました」

簡単な自己紹介と修造の仏壇に焼香を済ませた清志郎は、後ろで控えていた美桜たちに向き直り挨拶をする。

最初は美桜と玉置、雅彦家族の二手に分かれて向き合っていたが、今は左から雅彦、美桜、玉置の順に並び、後ろに宏美と瑠璃子が控えている。

「まずはこちらを……」

清志郎は、カバンから通帳と一通の封書を取り出して畳に並べると、まずは通帳を美桜の方へと押し出す。

通帳には、美桜の名前が印字されている。

「これは？」

自分の名前が書かれていたこともあり、通帳を手に取り中を確認した美桜は、そこに記録されている預金残高に目を丸くした。

「二千万円っ！」

横から通帳を覗き込んできた雅彦が声を跳ねさせ、乱暴に美桜から通帳をひったくる。

食い入るように通帳を眺める雅彦が「これだけあれば……」と、呟く。

今の雅彦は小さな食品会社で働いているが、美桜が生まれた頃は、自身で会社を経営していた。

時代の後押しされ一時期はかなり羽振りもよかったが、見通しの甘い事業計画はすぐに破綻し、会社は数年で倒産した。その際にできた借金のほとんどを修造が肩代わりしたのだとか。

幼い美桜にその頃の記憶はないが、玉兎堂でパートとして働く佐々木千尋がそう教えてくれた。

結果、今は一社員として働く雅彦だが、内なる野心は健在なのだろう。高額の預

金通帳の前に、あれこれ夢想しているらしい。

「これは、修造殿が孫娘である美桜殿に残された資産です」

心に灯る野心の火を吹き消すように、清志郎は通帳を雅彦から取り上げ美桜に返す。「何をするっ！」

雅彦は再度美桜から奪おうとしたが、それより早く玉置が手を伸ばして通帳を取り上げ、「ひとまず俺が預かります」と正座している膝の下に置く。

玉置のことを信頼している美桜は、その対応に異存はない。チラリと視線を向けると、清志郎も問題ないと頷く。

「おい、若造っ！ それは俺の金だぞ」

「これは、オヤジさんが美桜お嬢さんのために残したものだ」

怒鳴る雅彦を睨み返して、玉置が言う。

これまた千尋の情報によれば、今でこそ無口な職人といった風情の玉置だが、昔は鬼より鬼の玉置と界隈の不良たちに恐れられる存在だったらしい。

そのため、最初から玉置に腕っ節で勝てないことを承知している雅彦は、殴りかかるようなことはせず、憎々しげに玉置を睨むに止めている。

「いいか若造、美桜は未成年だ。子供の金を管理するのは親の役目だ。今はおとなし

く黙っというてやるが、そのことは忘れるなよ」

さつき美桜に『十七歳なんだから、自分でどうにかして生きればいい』と言っていた雅彦が嘯くと、玉置が片膝を立て袖をまくる。

「何をっ！」

いよいよ我慢ならないと、玉置が立ち上がりかけた時、清志郎が「次にこちらを」と、通帳と並べて出した封書を美桜の方へと押し出す。

「よこせ」

雅彦は、美桜を押しつけるようにして封書を手にすると、乱暴に封を破って中の手紙を取り出す。

和紙製の手紙には達筆な文字が綴られているのが、裏からでも透けて見える。そこに目を走らせた雅彦が呻く。

「な、なんだこの内容は……」

「そこに書かれているとおりです」

清志郎は、冷めた口調で雅彦に告げ、美桜と玉置に視線を向ける。

美桜と目が合うと、微かだが険しかった表情を和らげた。

「修造殿は、預金の他、この店の全ての権利を美桜殿に託されております」

「えっ」

思いがけない話に、美桜の口から小さな声が零れた。

背後の宏美と瑠璃子は、「どういうことよっ！　なんで美桜だけなのよっ！」と騒ぐ。

美桜より一つ年下の瑠璃子は、表向き宏美の連れ子ということになっている。しかしその実、雅彦が不倫の末に宏美に生ませた子供なので、父方の祖父に当たる修造とは血の繋がりがあある。

その修造が、美桜にだけ財産を残したことに納得がいかないのだろう。

騒ぐ瑠璃子たちを無視して、清志郎は玉置の反応を窺いながら続ける。

「玉兎堂を続けるかどうかは、美桜殿の判断に任せるのですが、もし続けるのであれば軌道に乗るまでは、玉置殿には支援を頼みたいとのことですよ」

その言葉に、玉置は力強く頷く。

「もちろん、尽力させていただきます。俺も俺の父も、生前オヤジさんから、自分もしものことがあった時はお嬢さんをよろしく頼むと言われていましたから」

さらに玉置は父親から、美桜に玉兎堂を続ける気があるのであれば、当面の間は自分の店の職人を応援に派遣すると伝言を預かっていると続けた。

それを聞いた清志郎は、小さく頷いて美桜を見る。

「そして美桜殿が成人するまでは、私の主である霧乃様が後見人を務めさせていただきます」

「え、鬼の頭領が」

「なんで美桜なんかの」

後ろに座る瑠璃子と宏美が悲鳴に近い声を出す、それも当然のこと。鬼の頭領である霧乃といえ、妖のみならず、この国の政治経済の全てを手中に収めている存在なのだ。

そんな大物と祖父に面識があっただけでも驚きなのに、その霧乃が、自分の後見人になるなんて……

思考が追いつかず目を丸くする美桜に、清志郎が言う。

「我が主は、この玉兎堂の味を気に入っておられ、それが縁で、修造殿と懇意にされています」

その説明で、多少は理解が追いつく。

小豆には邪気を払う効果があり、妖は、霊力の高い人間が作る小豆を使った和菓子を好む。

特にヨスガに巡り会えていない妖は、上質な和菓子を食すことで、魂の渴きを多少なりとも和らげているのだとか。

普通の人間である美桜にはよくわからないが、祖父はかなりの霊力があつたと聞いている。その祖父が作った和菓子で鬼の霧乃のお眼鏡にかなったというのであれば、納得がいく。

そして高齢の祖父は、自分にもしものことがあつた場合、残される美桜のためにあれこれ準備をしていてくれたらしい。

(おじいちゃん……)

無口な祖父の愛情に触れて、美桜が目を見詰ましていると、隣の雅彦が膝立ちになつて怒鳴る。

「ふざけるなっ！ 金も店も全部、俺のものだ」

憤慨した雅彦は、乱暴に霧乃からの手紙を破く。

「何が鬼の頭領だ。あんな化け物が儲けているから、俺の会社が潰れたんだ。……うわああっ」

完全なる逆恨みを口にしながら紙を破いていると、破られた手紙から青白い炎が上がり、雅彦の手を包み込んだ。

「あなた」

「パパ」

宏美と瑠璃子が雅彦に近付く。

「うわああ！ 熱いっ 熱いっ」

突然の発火に驚いた雅彦は叫び声を上げて、今や炎の塊となっている和紙を床に払い落とした。

不思議なことに、燃え上がるそれは畳に触れた瞬間、流麗な文字が綴られた一枚の和紙に戻っていく。

焦げ痕どころか、雅彦が破ったはずの裂け目もない。

全員が目丸くする中、一人冷静な清志郎は、それを拾い上げて雅彦を睨む。

「たかが人間ごときが、妖様の証文を無効にできると思うな。証文に危害を加えただけでこれだけの障りがあるのだ、私欲にまみれたおこないは慎むことだな」

「何を……」

雅彦が背中を丸め、手を守るようにして唸る。炎が消えても、炎に炙られた手には痛みが残っているらしい。

「後見人を引き受けた以上、成人するまでは美桜殿は霧乃様の財産の一部。それを害

するつもりなら、死を覚悟する必要がある」

清志郎は、上目遣いに睨む雅彦に冷たく言い放ち、拾い上げた和紙を美桜に差し出す。

受け取った紙は確かに燃えたはずなのに、触れても少しの熱も感じない。

「ふざけるな、だいたい……」

雅彦はまだ何か言おうとしていたが、それを宏美が押し留める。

「まあまあ、あなた、今日はもういいじゃないの。火傷の手当ても必要だし、ひとまず帰りましょうよ」

雅彦を宥める宏美は、なぜだか美桜と玉置にまで愛想笑いを向けてくる。

さっきまでの態度が嘘のようだ。

強がってはいても、火傷がかなり痛むのだろう。雅彦は、宏美の提案を渋々承諾し、二人に背中を摩られながら帰っていった。

「少しだけお時間をいただいても？」

三人が帰っていくと、清志郎が言う。

美桜と玉置がそれを了承し、場所を仏間の隣の居間に移すと、ちゃぶ台に向かい合って座る清志郎はカバンから書類を取り出して説明を始める。

内容は、美桜が高校を卒業するまでの支援の仕方と、今後の玉兎堂の経営に関するものだ。

ひとまず驚くような預金が入っている通帳はこのまま霧乃たちに管理してもらい、それとは別の口座に、月々の生活費を振り込んでもらうことになった。

店の方は、先ほど玉置が提案してくれたとおり、必要に応じて彼の父親の店から応援を頼み、これまでどおり続けていくことで話は簡単にまとまる。

もちろん美桜だって、学業に励む傍ら、できる手伝いはなんでもしていくつもりだ。

「高校卒業後のことはまた話し合うとして、ではそういうことで……」

話し合いを終えて、上がってきた縁側で靴を履く清志郎は、「そうだ」と呟き、美桜を振り返る。

「後見人を頼まれた際に、お母様の件は何いしました。その後のご家族との不和も、理解しています」

清志郎は一度そこで言葉を切って、雅彦たちがいた場所に視線を向けた。先ほどのやり取りを思い出したのか、微かに顔を擧めてから続ける。

「それを哀れに思ったからこそ後見人を引き受けられました。霧乃様はお忙しいお方です。無遠慮に今以上の支援を求めるのはお控えください」

その言葉に、美桜は大きく頷く。

「わかっています」

美桜からすれば、霧乃という大物妖が後見人になってくれたおかげで、店を奪われずに済んだのだ。それだけでも感謝しても足りないほどなのに、これ以上何かを求めつもりはない。

「日常的なことは、俺や周りが支えていますので」

玉置が請け合うと清志郎は納得し、時々自分も様子を見に来ると言い残して今度こそ帰っていった。

その後玉置も、父親に今後の支援の相談をするために今日は帰ると言うので、美桜はそれも見送ると玉兎堂の厨房に向かう。

いつの間にか時刻は夕方になっており、雨降りの今日は、厨房はいつもより早く訪れた夕闇に沈んでいる。

照明を点けたところで、主を失った厨房にはどうしようもない寂しさが漂っている。(……それでも店を続けていきたい)

だから、ここで立ち止まってはいけないのだ。

美桜は自分にそう言い聞かせて、厨房の調理器具の手入れを始める。

玉兔堂を後にした清志郎は、自身が運転する車で、霧乃が住まう屋敷に戻った。

鈍色の瓦屋根が美しい数寄屋門を潜って車を降りる頃には、ここ数日続いていた雨は上がっていた。

それでも厚い雲が残っていて、空を仰ぎ見ても月の姿はない。

「腹の立つ……」

駐車場に車を止め、和風の造りの屋敷を見上げて清志郎は自分の耳朶じだを強く揉む。

主である霧乃の品位を落とさぬよう感情を抑えてはいたが、二十四歳でまだまだ青臭さが抜けない清志郎としては、金の亡者のような美桜の父親や、見るからに腹黒そうな義母とその娘に憤りを覚えていた。

（特にあの父親……）

——何が鬼の頭領だ。あんな化け物が……

あの時、美桜の父親が発した言葉が、不快な雑音として、今も清志郎の耳にこびりついている。

清志郎の家は代々霧乃に仕えていて、一条一家は、そのことに強い誇りを抱いている。

妖がこの国の安寧のために尽力してきた歴史を考えれば、当然のことだ。

それなのに、人知を超えた妖の力に守られてきたことを忘れて、自分と異なるという理由だけで妖を蔑む者が時折いるので腹立たしい。

そして、そんな失礼な者がいてもなお、妖が人間を見捨てずにくれるのは、ヨスガという存在があつてのこと。

「ヨスガとは、人と妖が共に住まうこの世において、異なる理の中で生きる両者を繋ぐ存在」

この国で生きていけば幾度となく耳にする言葉を、清志郎は口にする。そしてそのまま、こう続ける。

「その存在は、悠久の時を生きる妖に与えられた癒やしとも、妖が人の世を見放すことのないよう科した神の呪縛とも言われている」

最初に誰が口にしたのかは知らないが、まさにそのとおりと認めるしかない。

人の世に住まう妖には、必ず強い魂の繋がりを持つ存在、いわゆる魂の番となる人間のヨスガが現れる。

妖にとって己のヨスガは、生きる指針だ。

ヨスガの喜びが妖の喜びであり、ヨスガが悲しめば、妖は己の魂が切り裂かれるような苦しみを覚える。

そして己のヨスガに名を呼ばれることは、妖にとって何物にも代えられない最大の喜びなのだから。

そこに妖の世界における序列は関係なく、鬼の頭領として他の妖たちに畏怖される霧乃でさえ、乾いた大地が水を求めるように、己のヨスガを求めて止まない。

永久に近い時を生きる妖とは違い、人の身であるヨスガの寿命には限りがあるため、常に一緒にいられるわけではないのだ。

妖は己のヨスガがこの世を去ると、魂の飢えを抱えながら、ヨスガが生まれ変わるのを待ちわびる。

いつどこに、己のヨスガが生まれ変わるかは神の采配次第。

わかっているのは、必ず人間としてこの国のどこかに生まれてくるということのみだ。

だから妖は、圧倒的な力の差があるのに、脆弱な人間を害することがほまない。

何せ気紛れに殺した女の腹に宿る子が、己のヨスガという可能性もありえるの

だ。……たとえそうでなくても、ヨスガの血縁者に繋がる可能性もある。

その恐れがあるからこそ、多くの妖は人間と、人の生きる世を大事に扱う。

「霧乃様のヨスガ様は、どこにいるのだろうか……」

霧乃のヨスガは三百年前に、その地位を妬んだ女に殺害されている。

そしてそれっきり、彼のヨスガが転生することがなかったのだが、十数年前について転生を果たした。

妖は己のヨスガの転生を肌で感じることができるといえるのだという。ただどこにいるかまではわからないため、霧乃は未だ己のヨスガと再会を果たせずにいる。

その焦燥感が、これまで以上に霧乃の心を蝕んでいる。

妖にとって霊力の高い人間の作る小豆を使用した和菓子には、数少ない癒やしだ。

霧乃は、玉兎堂の菓子を好んでいたのだが……

「新しい和菓子屋を探さないとな」

人として、不運な家庭環境に生まれた玉兎堂の孫娘を気の毒には思うが、清志郎が感情の重きを置くのは主である霧乃のことだ。

彼のヨスガを捜し出すことができれば、それが一番なのだが、霧乃が手を尽くしても見つけ出せずにいるのだから、清志郎ごときに捜し出せるわけがない。

それならせめて、玉兎堂にも引けを取らない和菓子屋を見つけたのだが、どうしたものか。

「よく考えたら、店まで行ったのだから、菓子の一つでも買ってればよかった」

美桜の父親のあまりな態度に苛立ち、残っている修造の菓子を買わせてほしいと頼むのを忘れていた。

今さらながらにそれが悔やまれる。

頭の片隅で、名店とされる和菓子屋のリストを思い起こしながら清志郎が霧乃の屋敷に入ると、使用人が小走りに寄ってきた。

何事かと驚いていると、小声で「朔夜の君がおこしです」と告げられる。

その名前に、つい清志郎の眉間に皺が寄る。

朔夜の君とは、少々面倒な性格をした高位の妖の名だ。

彼女は時折、前触れなく霧乃のもとを訪れては難癖をつけている。

相手が高位の妖なだけに無下にもできないので、使用人たちは対応に困っていたらしい。

「わかった」

短く返して清志郎が長い廊下を進むと、客間から粘着質な女性の声が聞こえてくる。

襖越しでは詳しい会話は聞き取れないが、甘く絡み付くような声は、間違はなく朔夜の君のものだ。

「霧乃様、清志郎です。ご依頼の件でご報告に上がりました」

廊下に膝をつくと共に、そう声をかける。

父や祖父どころか、一条家の者は先祖代々霧乃に仕えているので、苗字でなく名前を名乗るのが常だ。

清志郎はそのまま、返事を待たずに襖を開いた。

「おや、無作法者だね」

襖を開けるなり視界に飛び込んできた着物姿の美女が、黒目がちな目を細め、口元を着物の袖で隠して言う。

高く結い上げた髪を花や簪で飾り、豪華な打ち掛けを幾重にも重ねて気怠げに着崩し、帯を前結びにしている様は花魁を思わせる。

オロチと呼ばれる蛇の妖である、朔夜の君だ。

妖艶さを漂わせるこの蛇の妖は、人を惑わし、心を操る術に長けている。そのためか、朔夜の君に睨まれると、いつもどうにも落ち着かない。

それでもここは主のためにと、清志郎は表情を崩さず挨拶をする。

「これは朔夜の君、おこしとは知らず失礼いたしました。本日、我が主に来訪者があるとは伺っていないかったですから。……霧乃様と内々で話したい件があったのですが」

遠回しに話の邪魔だから帰れと促す清志郎に、朔夜の君はフンと鼻を鳴らす。

「ぬけぬけと。この男、実は狐の妖ではないのか？」

朔夜の君が、長机を挟んで向かいに座る着物姿の妖へと視線を向ける。

少し癖のある黒髪を後ろに流したその男こそが、清志郎の主である霧乃だ。

切れ長の目に高い鼻梁びりょう、スッキリした輪郭と、全てが整っている霧乃は、朔夜の君同様に人を魅了する美しさがある。そしてその反面、他者を寄せ付けない冴え冴えとした空気を纏まとっている。

清志郎としては、その姿に『さすが鬼の頭領』と畏敬の念を抱かずにはいられない。そんな霧乃の側の長机には、巻物のように長い手紙が広げられている。

今時、時代劇か祭事で見かけない奉書形式の手紙は、朔夜の君が持ってきたものなのだろう。

デジタル化が進んだこの時代でも、なぜだか妖は古式ゆかしい書式を好む。

「この件に関する返事は、改めて返す」

朔夜の君の言葉を無視して、奉書紙から視線を上げた霧乃が言う。

対する朔夜の君も、霧乃の声は聞こえていない素振りや清志郎に話しかける。

「お前の主は、気配を感じながらも未だ己のヨスガに巡り会えておらんそうだな。ヨスガが転生したというのは、三百年もヨスガに会えずにいる鬼の頭領殿の妄想ではないのか？」

朔夜の君の声には、霧乃を嘲る響きがある。

そのことに苛立ちを覚えるが、相手は鬼の頭領と対等に渡り合う高位の妖。清志郎がグツと反論の言葉を呑み込んでみると、朔夜の君が「だっておかしいではないか」と、楽しげに続ける。

「人の世において、高位の妖のヨスガとして生まれてくるのは最高のステータス。誰もがその地位になることを願い、ヨスガと妖が巡り会えるよう『百鬼夜行』という祭事が執り行われているほどだ。鬼の頭領殿も毎年それに参加しているのに、未だ巡り会えずにいるのは、どういうことじゃ？ それが答えなのではないのか？」

「この件に関しての返事は後日と言ったが、聞こえなかったか？」

客間に霧乃の冷やかな声が響く。

その声に気圧されたのか、さすがの朔夜の君もそれ以上の言葉は呑み込む。

霧乃が鋭い殺気を放ち黙っていると、その気まずい沈黙に耐えかねたのか、朔夜の君が腰を上げた。

「わかった。それでよい。……今日はこれで帰る。己のヨスガにばかり入れ込む鬼の頭領と違い、妾は忙しいのだ」

あからさまに不機嫌な顔になり、清志郎の脇をすり抜けて廊下に出ようとした朔夜の君は、ふと足を止めた。

どうかしたかと清志郎が視線を向けると、朔夜の君が、切れ長の目を弓なりに細めて問いかけてくる。

「おう、霧乃の従者よ。そなたは、ヨスガの幻影を追う己が主をどう思う？」

どう思うと問われても、清志郎としては、霧乃の言動に否定的な態度を取る朔夜の君に腹が立つただけである。

ついでに言えば、清志郎は霧乃の従者ではなく秘書である。

とはいえ、相手は高位の妖だ。機嫌を損ねて得になることは何もないので、ここは言葉を選んで返す。

「私は、霧乃様のお言葉を信じます」

「ほおお。お前は、物事を正しく判断できぬうつけなのだな」

「これは、手厳しいですね」

この妖、面倒くさい。——などと腹の中で毒づいていることを悟られないよう、ハッと、乾いた笑いでやり過ごす。

そんな清志郎に、朔夜の君はつまらなそうに息を吐く。

「仕事のできぬ奴よの。ヨスガに巡り会えぬ主のため、なんらかの策を講じるのも従者の仕事じゃろう。妾のような楽しみ方を、鬼の頭領殿に教えてやれ」

朔夜の君は、黒目がちな目で清志郎を見つめて言う。

「心得ました」

清志郎は、形ばかり恭しく頭を下げる。

朔夜の君はフンツと顔を背けると、清志郎の横をすり抜けて部屋を出ていく。

足音を立てず、滑るように廊下を進んでいく朔夜の君の後ろ姿を見送っていると、

霧乃が清志郎に声をかける。

「ほうっておけ。あれは、人でも妖でも、周りの者が自分より不幸でないと満足できないただけだ」

清志郎はその声を合図に襖を閉めて、霧乃に向き直る。

「その矛先が霧乃様に向かうことに、納得がいきません」

先ほどまで朔夜の君が座っていた場所までにじり出て、清志郎が言う。
その言葉に一瞬だけ苦笑した霧乃は、清志郎に視線を向けた。
染みもホクロもない陶器のような滑らかな肌。造形の美しさが際立つシンメトリー
の顔は、何度見ても見慣れることのない神秘的な美しさがある。
妖は総じて美しいが、その中においても霧乃の美しさは別格だ。

「首尾は？」

「霧乃様の証文が、さっそく役立ちました」

質問に対する答えは、それだけで足りたようだ。

彼は興味なげに「そうか」と呟き、朔夜の君が持ち込んだと思われる手紙に意識を
集中させる。

（人がいいというのも厄介だ）

眉間に深い皺を刻む霧乃に、清志郎は静かに同情する。

妖相手に『人がいい』というのも妙だが、霧乃は人間社会で顔が利くだけでなく、
妖にしては温厚な性格をしている。

そのため、人間からも妖からも頼りにされ、しばしば厄介事を持ち込まれてはその
解決に心を砕いて尽力するのだ。

結果、容姿端麗な上、権力財力だけでなく、有り余る時間まで持っているにもか
わらず、我が主が日々の暮らしを謳歌おうちかしている様子はない。

「……？ 報告が済んだのなら、帰っていいぞ」

清志郎が家族と共に暮らす自宅は、同じ敷地内の離れにある。

霧乃はその離れのある方向にチャリと視線を動かし、また手紙に視線を落として眉
間を揉む。

よほどの面倒事が持ち込まれているようだ。

朔夜の君の言葉を鵜呑みにする気はないが、主のそんな姿に、何か自分にできるこ
とはないかと考える。

（とはいえ、転生したらしいヨスガ様の居所は不明だし、お気に入りの和菓子職人は
逝去してしまっただ……）

どうしたものかと考えつつ清志郎が腰を浮かしかけた時、霧乃がなんの気なしに
呟く。

「同じ妖でありながら、朔夜の君は己のヨスガへの執着が薄いのか、最近はただの人
間になりたいそう入れ込んでいるそうだ」

聞けば清志郎が戻る前に、朔夜の君は、最近自分が囲っている美丈夫の自慢話をし

ていたのだという。

先ほどの『己のヨスガにばかり入れ込む鬼の頭領と違い……』という捨て台詞は、そのことを指していたらしい。

「まあ、妖が必ず己のヨスガと友好な関係が築けるとは限りませんし、朔夜の君のヨスガは、今は現世を離れておられるそうですから」

妖と違い、人であるヨスガの命には限りがある。

しかも同じ魂の持ち主であっても、ヨスガは、異なる人格を持つて生まれ変わるの
で、魂の番である妖に必ずしも好意を抱いてくれるとは限らない。

強い執着を抱くのは妖の側だけで、ヨスガの方は、一人の人間として、他の人を好きになることもある。

低位の妖のヨスガの中には、自分がそんなもののヨスガであることを厭い、その存在を拒絶する者もいるという。

最愛の存在に会えないのも辛いですが、己のヨスガの感情が自分に向いていないのを目の当たりにするのも辛い。

妖の中には、そういった憂さを晴らすために、他の人間や同族と戯れの間係を持つ者もいる。

そこまで考えて、清志郎はハッとしました。

「清志郎、どうした？」

中途半端に腰を浮かせて思考を巡らす清志郎に、霧乃が怪訝そうな眼差しを向ける。声をかけられた清志郎は、机に手つき、霧乃の方に身を乗り出した。

「修造殿のお孫さん、僂げで可憐なお嬢さんでしたよ」

清志郎の言葉に、霧乃がわずかばかりだが目をみはる。唐突な発言というより、その声の大きさに驚いた様子だ。

先ほど美桜には、霧乃は忙しいので、後見人だからといって頼られては迷惑だと言ったが、霧乃の方が彼女に興味を持つのであれば話は別である。

玉兎堂の孫娘との交流が、主の気晴らしにならないだろうかと前のめりになる清志郎の姿に、霧乃が納得した様子で言う。

「人の恋愛に口出しするほど野暮ではないから安心しろ。ただ一目惚れしたにしても、口説くのはその孫娘が成人するのを待てよ。万が一にも孫が犯罪者になつては、尚之が気の毒だ」

尚之とは、清志郎の祖父の名前だ。

言うべきことは言ったという感じで、霧乃は手紙に意識を戻そうとする。清志郎は、

慌ててそれを否定した。

「そうじゃなくて、霧乃様にどうかという意味です」

「俺に？」

霧乃の表情に嫌悪の色が浮かぶが、清志郎としては一度その考えに辿り着くと、不思議とそれが最善の策に思えてくる。

だというのに、霧乃が話に乗ってくる気配はない。

「興味ない。それよりも俺は、琴葉に詫びねばならぬことが幾つもある」

霧乃が、グツと奥歯に力を入れる。

琴葉というのは、前回の霧乃のヨスガの名前だ。

三百年前、その琴葉は、霧乃が彼女の側を離れていた隙に殺害された。

本能でヨスガの異変を感じ、霧乃が駆け付けた時には、彼女はすでに虫の息で、そのまま霧乃の腕の中で息を引き取ったという。

霧乃はそのことを、まるで自分が彼女を殺めたかのように後悔しているが、妖として万能の神ではないのだから仕方ない。

「しかし、少しくらい……」

なおも食い下がろうとした清志郎だが、霧乃に睨まれて言葉を呑み込む。

「清志郎、お前の主は誰だ？ 誰の声に耳を傾ける？」

冷やかな眼差しで霧乃に問いかけられた途端、清志郎の中から先ほどまでの熱が消えていく。

「あれ……私は今……」

冷静さを取り戻せば、どうして自分がそんなことを言ったのかわからない。

ふと視線を向けると、霧乃は手の動きで清志郎に部屋から出ていくよう指示している。『帰っていい』ではなく『出ていけ』と。

とりつく島もない霧囲気に、清志郎は項垂れて部屋を辞することしかできなかった。

「これでよし」

着物の袖をたすきで留めて片付けをしていた美桜は、満足げに息を吐く。

床や棚の掃除はもちろん、調理道具や木型、押し棒を拭き、刷毛の毛並みに乱れがないかを確認する。和菓子を保管するのに使う番重を十字に重ねて、空気を通すことも忘れない。

そうやってひととおりの作業を終えると、修造が厳選して仕入れていた小豆を水にさらす。

店によってやり方が違うが、玉兎堂で小豆あんを作る時は、小豆を三倍の量の水に一晩さらしてから煮るようにしている。

小さな手間を惜しまないことで、小豆の芯まで甘さを染み込ませた、美味しい小豆あんを作れるのだ。

「幸せな味になりますように」

美桜は繰り返し返し眩きながら、まだ硬い小豆を水の中で遊ばせて、割れたものや色の悪いものを見つけては取り除いていく。

それは、この家に引き取られてきた美桜に、祖父が最初に任せた仕事だ。

「幸せな味になりますように。誰かが幸せでありますように」

そっと手を動かしながら、美桜は記憶を巡らしていく。

美桜がこの家で暮らすようになったのは十数年前、母のあやめが、突然この世を去ったことに始まる。

雅彦は美桜が幼い頃から不在がちで、たまに家にもいても、話しかけられれば無視をするし、些細なことで癩癩かんしやくを起こして家族を叱りつけてばかりだった。だから美桜

としては、父がいない方が嬉しかったくらいだ。

そんな両親が離婚しなかった理由を、幼い美桜は知らない。

とにかくあやめは、父親の不在で美桜に寂しい思いをさせないよう、仕事の傍ら家事にも子育てにも一人で奮闘していた。

だから美桜は、父の不在になんの不満も感じていなかったが、あやめは違ったのだろう。常に笑顔を絶やさず、気丈に振る舞いながらも、心の内に疲労や不安を蓄積させていたのだ。

そしてその見えないものに押しつぶされて、ある夜、突然倒れた。

幼い美桜には真夜中と言える時刻、ドスンと大きな重たい音が聞こえた。普段耳にするのではない音に驚き、美桜は母を呼んだ。

しかし何度呼んでも返事はなく、それどころか物音一つしない。

自分以外の気配を感じない静寂に不安を覚えた美桜は、ベッドを抜け出した。

そして、台所で倒れている母を発見したのだ。

美桜が声をからすまで呼びかけても母は反応してくれず、どうすればいいかわからず泣きじゃくっている間に、徐々に母の体から体温が抜けていくのを感じた。

その段になって、美桜はやっと、助けを呼びに行くべきだと思いついた。

裸足で家を飛び出し、夜の闇の中、母を助けてくれる人を探し求めた。

闇雲に近くの家のインターフォンを鳴らして回ったが、遅い時刻の突然のチャイムな上、子供の美桜ではインターフォンのカメラに姿が映らないこともあり、なかなか呼び出しに応じてくれる人は見つからなかった。

そしてやっと応じてくれる人を見つけても、混乱したまま話す美桜の説明では要領を得ず、自宅に連れていくのにさらに時間がかかった。

足の裏から血を流して走り回り、どこにか家まで連れてきた大人は、倒れているあやめを見て、救急ではなく警察に通報した。

そこからの記憶は曖昧だが、久しぶりに家に帰ってきた雅彦が喪主となり、あやめの葬儀を執りおこなった。その際、彼が美桜にかけた言葉はただ一言、『ついでにお前も死ねばよかったの』だった。

その瞬間、美桜は自分の世界が完全に壊れたような気がした。

愛してくれた母はこの世を去り、父には生きることを望まれていない。それは幼い子供の心を壊すのに十分すぎる出来事だ。

葬儀が終わった頃、周囲は美桜が声を失っていることに気付いた。

母のために助けを呼べなかった自分を恨んでいたし、ずっと自分たち親子を無視し

ていた父に届きたい声はなかった。

そんな美桜の様子に、雅彦は自分へのあてつけがすぎると激怒した。

もとより雅彦にとって美桜は、庇護するべき愛娘ではなく、あやめとの離婚を妨げる厄介者でしかなかったのだ。

雅彦は声を失った娘に寄り添うことなく、反論しないのをいいことに、修造に世話を押し付けた。そして自分は早々に、それまで不倫関係にあった宏美と再婚し、晴れて正式な家族として瑠璃子たちとの新生活を始めたのだ。

それを知った修造は雅彦を勘当し、当時は健在だった祖母と共に美桜を育ててくれた。

祖父母は言葉を発しようとしないうちに美桜に苛立つこともなく、世話を焼き、美桜の気持ちが悪く落ち着く頃合いを見計らって、店の手伝いを頼みたいと声をかけた。

誰にも必要とされないと思いき、死んだように生きていた美桜だったが、それを引き受けると、三日に一度のペースで煮る小豆の下準備を任された。

修造曰く、『美味しい小豆あんを煮る秘訣は、小豆に手間と愛情をかけること』なのだとか。

そのために小豆を水にさらす際、優しい言葉をかけてほしいと美桜に頼んだ。

この年になれば、あれは祖父の嘘だったとわかる。

誰とも話さなくなった美桜に、人間相手でなくともいいから言葉を発する機会を与え、少しずつでもその状態を取り戻させたかったのだろう。

そのおかげもあり、美桜は徐々に声を取り戻していった。

ただそれでも、今日のように、明確な敵意を向けてくる瑠璃子や雅彦を相手にすると、萎縮して声が出なくなってしまうのだが。

そしてそんな日々の中で、美桜は自然と、自分も祖父のような和菓子職人になりたと思うようになっていた。

まだまだ未熟で、言葉にするのも恥ずかしい目標なのでちゃんと話したことはなかったが、きつと修造は、美桜のその思いに気付いていたのだろう。

だから高齢の自分にもしものことがあった時に備えて、玉置親子にいざという時の助っ人を頼み、霧乃という大物妖に、美桜の行く末を託してくれたのだ。

「おじいちゃん、ありがとう」

祖父との別離は辛いですが、自分を思っで残してくれたものがあるからまだ頑張れる。

祖父の深い愛情と、その願いを聞き入れてくれた霧乃に感謝しつつ、美桜は丁寧小豆を選別していく。

第二章 どら焼き

翌朝、美桜が出勤してきた玉置と一緒に、昨日下準備をしていた小豆を火にかけていると、厨房にパートの千尋が顔を出した。

「おはようございます。何を手伝えはいい？」

そう言いながら、千尋は手を洗い、エプロンをかけて身支度を始める。

「千尋さん、店を開くのは明日からですよ」

美桜は、戸惑いつつその声をかけた。

一週間以上お店を休んでいたの、日持ちするもの以外は全て作り直しとなる。そのため今日は、小豆あんを煮るなどの仕込みに使い、店の再開は明日からだ。

三角巾を被る千尋は、美桜に明るく返す。

「昨日玉置君が連絡をくれたわ。話もひととおり聞かせてもらって、ちゃんとわかってるから、洋服で来たんじゃない」

れており、普段は着物姿で出勤してくる。

だが今日の彼女は珍しく、動きやすそうな洋装だ。

「美桜ちゃんは、今日から学校でしょ。だから私が、玉置君の手伝いをするわ」

そう言っただけ千尋は、美桜が手にしていたザルを取り上げると、「子供は学校に行きなさい」と美桜を厨房から追い出そうとする。

もちろんそれは、彼女の優しさだ。

実家が、玉兎堂と同じように、月代神社の門前商店街で土産物屋を営んでいるという縁で、千尋はこの店を手伝うようになった。そんな彼女には、美桜と同世代の娘がいるので、美桜のことも娘のように世話を焼いてくれる。

「千尋さん、ありがとうございます。でもまだ時間があるから、もう少しだけ手伝いをさせてください」

やっと店を再開できるのだから、少しでも手伝いたい。

美桜のそんな思いが伝わったのだろう。千尋は壁掛け時計の時刻を確認して「じゃあ、あと二十分だけね」と、了承する。

そして手を動かしながら、昨日の詳しいいきさつを改めて玉置から聞くと、盛大にため息を吐いた。

「雅彦さんの性根は、一生変わらないんだろうね。旦那さんも奥さんも、これまでどれだけ苦労してきたことか」

千尋の言葉に玉置が頷く。

「オヤジさんが、きちんと手を打っておいてくれて助かった」

玉置の言葉に、今度は千尋が頷く。

「本当に。そんな大物妖怪と旦那さんに縁があったのは驚きだけど、そのおかげで、あのごうつく息子を追い払うことができたんだから何よりよ」

「お店を続けられるのは、玉置さんのおかげです」

あの時、玉置は美桜のために雅彦に抗議してくれた。霧乃が後見人になってくれたとはいえ、彼の助けがなければ店を続けることはできなかった。

仕入れに仕込み、菓子製造。高校生の美桜では知識も技術も足りず、対応できないことばかりだ。

今日から登校を再開できるのだから、玉置が仕込みを引き受けてくれているおかげである。

心からの感謝を込めた美桜の言葉に、千尋がニヤリと意味深な笑みを浮かべた。

「そりゃ玉置君はねえ、美桜ちゃんのためなら命だってかけますよ」

玉置が美桜にここまでしてくれるのは、親子二代にわたって修造のもとで修業した恩があるからだ。それなのに、千尋が大げさなことを言うので苦笑するしかない。

「お嬢さん、そろそろ学校に行つた方がいんじゃないですか？」

美桜が返答に困っていることに気付いたのでろう。玉置が助け船を出す。

壁掛け時計に視線を向けると、確かにそろそろ準備をして登校した方がいい時刻を示している。

「すみません。じゃあ、あとをお願いします」

エプロンや三角巾を外す美桜に、玉置が言う。

「それと、時間はかかっていいので、俺がいなくなった時に備えた和菓子のは、頭に置いておいてください」

投げかけられた言葉に、美桜は身が引き締まる思いがした。

先ほど千尋は、玉置が美桜のためなら命もかけるようなことを言ったが、これが現実なのだ。

今朝、千尋が来る前に、玉置には『できる限りの協力はさせていただきますが、自分がいなくなった時の備えはしておいてください』と、釘を刺された。

その言葉でわかるように、彼は修造への義理を果たすため、美桜が独り立ちできる

まで玉兎堂に留まるにすぎないのだ。

玉置には玉置の人生があるので、もちろんそれで構わない。

そして美桜は、頼れる肉親はもういないのだから、自分一人で生きていく覚悟をしなくてはならないのだ。

「頑張ります」

自分自身に言い聞かせるためにも、いつになくハッキリとした口調でそう答えて、美桜は厨房を後にした。

「素直じゃないねえ」

美桜の背中を見送った玉置は、隣から聞こえてきた声に千尋を睨んだ。

強面こわもてで知られる玉置だが、店の古株である千尋にすこんだところで相手にしても
らえない。

千尋は、軽く肩をすくめる。

「旦那さんだって、玉置君を信頼しているから、店や美桜ちゃんのことを託したんだ

と思うよ。それにアンタだって……」

とうに修業期間を終えている玉置が、今も玉兎堂に留まっている理由を千尋は承知しているのだろう。

「ただどその先を言わせる気はないので、玉置は話題を変える。」

「千尋さん、霧乃という妖についてどれくらい知ってますか？」

「ちよっと、妖様を呼び捨てにするものじゃないよ」

千尋が玉置を窘めた。

そう義務づけられているわけではないが、多くの人は、妖の存在を口にする際に敬称を付ける。

玉置だって、この国における妖の重要性は理解しているし、霧乃という妖がその中でも特に尊ばれる存在であることは承知だ。

だから雅彦のように妖を蔑むつもりはないが、だからと言って興味もないので、敬称を付ける気はない。

「で、どんな妖が知ってますか？」

「まずは、この国最高のイケメンってことかしら」

千尋は真面目な顔で答えるが、玉置としてはすぐどうでもいい情報である。

立ち読みサンプル はここまで

求められている情報がそこではないことに、千尋もすぐに気が付いたのだろう。

「あとは、経済界の重鎮で、陰で日本を操る存在。あの方を敵に回せば、政財界では生きていけないし、その資産は小国の国有財産の上をいくそうよ」

すらすらと並べられる情報に、玉置は小さく頷く。

そこまでの大物が美桜の後ろ盾になってくれるのであれば、いつか自分にもしものことがあっても大丈夫だろうか……

玉置としては、自分の命が続く限り、美桜を支えたいと思っている。

ただど人の命には限りがあるし、いつ何時、不慮の事故に遭わないとも限らない。

現に修造も、美桜の母親も、こんなに早く彼女一人を残して彼岸に渡るつもりはなかっただろう。

そして美桜が、その突然の別れにどれほど胸を痛めたか理解しているからこそ、玉置は不用意に、彼女に『俺が一生側にいる』なんて誓う気にはなれない。

言葉にしなくても、玉置は美桜の側を離れるつもりはないのだから、それでいい。

無責任に言葉を投げかけるより、今のうちに自分に何かあっても美桜が大丈夫なように準備をしておきたい。

それが玉置なりの、彼女に対する愛情表現なのだ。